

〔報 告〕

わが国における高齢者虐待に関する文献検討： 家族同心球環境理論にもとづいた分析

易 覃秋子¹⁾ 本田 順子¹⁾ 法橋 尚宏¹⁾

要 旨

背景と目的：わが国では、高齢者虐待に関する相談・通報、虐待判断件数は増加傾向にあり、虐待者と被虐待者を含む家族システムユニットへの支援が急務となっている。本研究は、高齢者虐待に関する国内文献を検討し、高齢者虐待発生の危険／原因因子と予防／阻止因子、高齢者虐待が発生している家族への支援策を明らかにすることを目的とした。

方法：医中誌Webを使用し、“高齢者虐待”と“家族”の論理積をキーワードとして、原著論文に限って検索した。そのうち、高齢者虐待の危険／原因因子と予防／阻止因子、高齢者虐待への支援策に関する記述がある59本の文献を分析対象とした。ガラードのマトリックス方式で文献を整理し、ベレルソンの内容分析を行った。

結果：危険／原因因子としては【介護者と高齢者の人間関係問題】【高齢者の心身の疾病・障害】【介護者の介護ストレス・負担の増加】など、予防／阻止因子としては【情報や交流の場の提供】【家族全体の心理的なサポート】などが抽出された。高齢者虐待への支援策としては、【多職種・多機関の連携】のように、家族外部環境システムにおける支援策が最も多く抽出された。

考察と結論：看護職者は、本研究で明らかになった高齢者虐待の危険／原因因子を除去したり、予防／阻止因子を提供することで、最善の家族支援が実現できるようになるであろう。高齢者虐待への支援策については、今後、家族内部環境システムへの支援策を検討する必要がある。

キーワード：高齢者虐待、文献検討、影響因子、家族、家族同心球環境理論

1. はじめに

わが国の65歳以上の高齢者人口は、2012年8月では3,058万人であり、全人口に対して24.0%にまで達している。さらに、2025年には3,657万人となり、2042年にはピーク（3,878万人）を迎えると予想されている（厚生労働省、2014a）。平均寿命の上昇に伴う高齢者数の増加により、高齢者介護をめぐる様々な問題や課題が議論されているが、その中でも、高齢者虐待問題は大きな注目を浴びている。2006年4月には、高齢者虐待の予防およびその

養護者（介護者）に対する支援などを目的とした高齢者虐待防止法（高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律）が施行された。しかし、2012年の厚生労働省の調査結果をみると、養護者による高齢者虐待は15,202件あり（厚生労働省、2014b）、養護者による虐待相談・通報件数は、法の制定後も増加している。高齢者虐待が減少しない要因として、養護者の介護負担、高齢者の認知症とその重症度、さらに養護者と高齢者の人間関係の問題などがあげられている（檜原、黒澤、佐藤他、2013）。

家族と環境との働き合いは、家族の存在を支える最も根源的な事実であり、家族が1つのシステムユ

1) 神戸大学大学院保健学研究科家族看護学分野（家族支援CNSコース）

ニットとして、家族内部環境との相互作用および家族外部環境との交互作用をすることで家族生活が成立している（法橋，樋上，小林他，2010）。したがって、家庭内での高齢者虐待を予防するためには、家族内部環境のみを重視するのではなく、家族外部環境にも視点を置くべきであり、家族内部環境との相互作用、家族外部環境との交互作用両方の視点から家族に支援しなければならない。そこで、本研究では、家族同心球環境理論（Concentric Sphere Family Environment Theory, CSFET）を理論的基盤とし、高齢者虐待に関する文献を検討することにした。

家族同心球環境理論（CSFET）は、家族看護学研究者／実践者の法橋が提唱した家族システムユニットのウェルビーイングに作用する家族環境に焦点化した家族看護理論である（法橋，本田，2013）。この理論では、3つの評価軸（構造的距離，機能的距離，時間的距離）によって家族環境の3次元時空を形成し、その中に5つのシステムの立体的な全体像を可視化する。5つのシステムとは、スーブラシステム（国民性・地方性，宗教などを含む），マクロシステム（家族の日常活動の場，社会資源・公共サービス，政治・経済などを含む），ミクロシステム（地域生活圏，親類，友人などを含む），家族内部環境システム，クロノシステムである。家族内部環境システムとは、家族員同士が相互作用している家族システムユニット内の範囲のことであり、クロノシステムとは、現在から未来に向かったベクトルをもつ時間枠のことである。スーブラシステム，マクロシステム，ミクロシステムは、家族外部環境システムである。家族同心球環境理論（CSFET）を理論的基盤として用いることで、高齢者虐待発生の影響因子および高齢者虐待への支援策を家族内部環境システムと家族外部環境システムから、ホリスティックに明らかにできると考える。

高齢者虐待発生の影響因子には、高齢者虐待の発生リスクを高めたり、発生と因果関係をもつ危険／原因因子がある。さらに、高齢者虐待の発生を予防

したり、阻止する予防／阻止因子があると考えられる。これらの影響因子を明らかにすることによって、高齢者虐待が発生する家族への支援の方向性を示すことができると考える。

以上より、本研究の目的は、文献検討により、家族同心球環境理論（CSFET）の3つの評価軸と5つのシステムから、高齢者虐待発生の危険／原因因子と予防／阻止因子、高齢者虐待への支援策をホリスティックに明らかにすることとした。高齢者虐待は日本のみでなく、アメリカ，イギリスなどの欧米諸国でも深刻な社会問題となっている。また、高齢者虐待という社会問題は、家族同心球環境理論（CSFET）の家族内部環境システムだけでなく、家族外部環境システムとも交互作用し、社会的，文化的環境からの影響を受けている可能性がある。これらを考慮して対応策を検討し、政策立案するべきであるとの指摘（梅崎，2012）もあることから、本研究では、日本国内のみの文献を分析対象とした。

II. 用語の操作的定義

1. 高齢者虐待の定義

2006年4月に高齢者虐待防止法が施行され、高齢者とは65歳以上の者とし、虐待を養護者による高齢者虐待と養介護施設従事者などによる高齢者虐待に分けて定義している。本研究における虐待は、養護者による高齢者虐待に限定し、高齢者虐待の定義は、高齢者虐待防止法に定義された養護者による高齢者虐待に準拠した。養護者とは、高齢者を現に養護する者であって、養介護施設従事者など以外のものでされており、高齢者の世話をしている家族，親族，同居人などが該当する。養護者による高齢者虐待とは、養護者が養護する高齢者に対して行う、次の1) から5) の行為である。さらに、高齢者の人権保護の観点から、高齢者本人自身による虐待と考えられるセルフ・ネグレクト（自己放任・自虐）も虐待の類型として重要であるため、6) として高齢者虐待の定義に加えた。

1) 身体的虐待

“高齢者の身体に外傷が生じ、または生じるおそれのある暴力を加えること”とした。

2) 介護・世話の放棄・放任

“高齢者を衰弱させるような著しい減食、長時間の放置、養護者以外の同居人による虐待行為の放置など、養護を著しく怠ること”とした。

3) 心理的虐待

“高齢者に対する著しい暴言または著しく拒絶的な対応、その他の高齢者に著しい心理的外傷を与える言動を行うこと”とした。

4) 性的虐待

“高齢者にわいせつな行為をすること、または高齢者にわいせつな行為をさせること”とした。

5) 経済的虐待

“養護者または高齢者の親族が当該高齢者の財産を不当に処分すること、その他当該高齢者から不当に財産上の利益を得ること”とした。

6) セルフ・ネグレクト（自己放任・虐待）

“高齢者が通常一人のひととして、生活において当然行うべき行為を行わない、あるいは行う能力がないことから、自己の心身の安全や健康が脅かされるような状態に陥ること”とした（津村，入江，廣田他，2006）。

2. 危険因子，原因因子，予防因子，阻止因子の定義

危険因子とは家族症候（高齢者虐待）を出現させやすくする因子であり，原因因子とは家族症候（高齢者虐待）の出現を引き起こす因子である。逆に，家族症候（高齢者虐待）を出現させにくくする因子は予防因子，家族症候（高齢者虐待）の出現を阻害する因子は阻止因子であると本研究では定義する。危険因子，原因因子，予防因子，阻止因子は，家族症候を理解するための用語であり，家族症候は家族システムユニットが主観的に認知している“家族症状”と看護職者が客観的に観察できる“家族症候（家族徴候）”を合わせた家族システムユニットの困難現象である（法橋，樋上，小林他，2010）。ただし，危険因子と原因因子，予防因子と阻止因子をそ

れぞれ厳密に区別することは難しいため，本研究では，それぞれを危険／原因因子，予防／阻止因子とする。

III. 方法

1. 文献の検索方法

文献データベースとして医中誌Web（医学中央雑誌刊行会）を用い，掲載誌発行年を“1982年以降”，キーワードを“高齢者虐待”と“家族”の論理積とし，原著論文に限定して検索を実施した（2013年12月実施）。この条件で抽出された103本の文献の表題および抄録を確認し，国外の高齢者虐待問題に関する文献，高齢者への介護が主題になっている文献などで，わが国における高齢者虐待に関する研究ではないと断定できる文献を除外した。高齢者虐待発生の危険／原因因子と予防／阻止因子，高齢者虐待への支援策に関する記述がある文献として59本を分析対象とした。

2. 分析方法

研究の動向を把握するために，掲載誌発行年ごとに文献を分け（1992年から2001年，2002年から2005年，2006年から2009年，2010年から2013年），さらに，各文献の調査方法で分類した。調査方法は，事例調査，面接調査，質問紙調査，既存資料調査の4つとした。また，ガラードのマトリックス方式（Garrard, 2011）を用いて，筆頭著者名，表題，学術雑誌名，発行年，目的，対象者などを列トピックとし，文献内容を検討した。

59本の文献から，高齢者虐待の危険／原因因子および予防／阻止因子，高齢者虐待への支援策に関する記述部分を抽出し，記述内容にもとづいて家族同心球環境理論（CSFET）の5つのシステム（スープラシステム，マクロシステム，ミクロシステム，家族内部システム，クロノシステム）に分類した。さらに，ベレルソンの内容分析（Berelson, 1952）の手法を用いて，内容が1つだけ含まれる記録単位に分けた後，各システム内で分類した内容を

忠実に反映したサブカテゴリ、カテゴリを抽出し、カテゴリに分類された記録単位数を算出した。カテゴリ化の分析過程は、3名の研究者で合意が得られるまで検討を重ねていった。

なお、文献から抽出する高齢者虐待の危険／原因因子および予防／阻止因子の選択基準と除外基準は、次に示したとおりである。

1) 選択基準

①虐待群と対照群を設定した比較研究から得られた高齢者虐待の危険／原因因子のように、結果から明らかに高齢者虐待の危険／原因因子であると説明できるものは含めた。

②結果で、高齢者虐待の発生と量的に正の相関がある危険／原因因子、または負の相関がある予防／阻止因子は含めた。

③考察で、“高齢者虐待に関係がある”“高齢者虐待発生を引き起こす因子である”“高齢者虐待に影響している”のように、高齢者虐待の危険／原因因子を説明したものは含めた。

④考察で、“高齢者虐待の予防に有効である”“高齢者虐待の解決に有効である”“高齢者虐待リスクの軽減に有効である”のように、高齢者虐待の予防／阻止因子を説明したものは含めた。

2) 除外基準

①他の研究者の先行研究から引用した高齢者虐待の影響因子は除外した。

②考察で、“…かもしれない”“…の可能性はある”のように、著者の推測による高齢者虐待の影響因子は除外した。

IV. 結果

1. 収載誌発行年と調査法別にみた文献数

収載誌発行年別に分類した59本の文献数を表1に示した。2006年から2009年の期間が24本で最も多く、1995から2001年の期間が5本で最も少なかった。

調査方法別にみると、質問紙調査が31本で最多であった（そのうち3本は面接調査との併用、1本は既存資料調査との併用）。次いで、事例調査は15本で、面接調査と既存資料調査がそれぞれ9本、8本であった。

2. 文献内容

分析対象となった59本の文献を表2にまとめた。なお、59本の文献の中で、高齢者虐待の危険／原因因子および予防／阻止因子に関する記述があった文献は合計33本、高齢者虐待への支援策に関する記述があった文献は合計47本あった（両方の記述があるものを含む）。

また、研究対象者の特徴としては、質問紙調査の回答者には、介護員、看護職者、ケアマネジャーなど高齢者にかかわる専門職者を対象とした文献が最も多かった（31本中23本）。事例調査の対象者は、主に養護者に虐待された高齢者であった（15本中12本）。面接調査では、保健師、介護職者など高齢者虐待にかかわる専門職、介護している家族員を対象とした研究があり、既存資料調査では、高齢者虐待に関する統計資料、報告書などを対象とした文献があった。また、研究の目的をみると、高齢者虐待の実態や影響因子を明らかにすることを目的と

表1. 収載誌発行年と調査方法別にみた高齢者虐待に関する文献数（文献数 = 59本）

収載誌発行年	事例調査	面接調査	質問紙調査	既存資料調査	合計 (%)
1995～2001	0	0	4 ^{a)}	2 ^{a)}	6 (9.5)
2002～2005	5	2 ^{b)}	4 ^{b)}	1	12 (19.0)
2006～2009	5	4 ^{c)}	15 ^{c)}	2	26 (41.3)
2010～2013	5	3	8	3	19 (30.2)
合計 (%)	15 (23.8)	9 (14.3)	31 (49.2)	8 (12.7)	63 (100)

^{a)}質問紙調査と既存資料調査を実施した1文献を含む。

^{b)}面接調査と質問紙調査を実施した1文献を含む。

^{c)}面接調査と質問紙調査を実施した2文献を含む。

表2. 高齢者虐待に関する文献のレビュー・マトリックス (一部) (文献数 = 59本)

筆頭著者名, 表題, 学術雑誌名	発行年	目的	対象者
田中荘司, 老人虐待の調査実態からみえてきたもの, 保健婦雑誌	1995	家庭内虐待を把握し, 新ゴールドプラン終了後に表面化する人権福祉問題への基礎的研究資料を得ること	虐待に該当する相談ケース
佐々木明子, 高齢者の虐待と支援に関する研究 (2) 3県の実態調査から, 保健婦雑誌	1997	高齢者への虐待の予防と支援の方向性を見いだすこと	看護職者
福島道子, 高齢者虐待の看護・介護職者の認識に関する研究: 家族介護に伴う虐待に焦点を当てて, 健康文化研究助成論文集	1998	在宅における家族介護をケアする看護・介護職者は, 高齢者虐待をどのように定義するか, 看護・介護職者は虐待や扶養・介護に対してどのような文化的認識をもっているか, 看護・介護職者がケア活動を通して高齢者虐待をどの程度把握しているかを明らかにすること	看護職者と介護職者, 関東圏を居住地とする青年, 中年, 高齢者
小野ミツ, 都市部と郡部における在宅要介護高齢者虐待の比較検討: 福岡県における実態調査と追跡調査から, 高齢者のケアと行動科学	2000	都市部と郡部の高齢者虐待の特徴を比較し, 虐待の予防と支援について検討すること	高齢者虐待事例と看護職者
赤司秀明, 介護家族による高齢者虐待とその防止策に関する研究: 心の健康問題から取組む有効性を探る予備調査より, 介護福祉学	2000	介護家族による高齢者への虐待の実況を把握するとともに, 高齢者虐待を介護家族の心の健康問題として対処することの有効性を探ること	高齢者福祉課または該当課の介護福祉領域担当の専門職者
松本一生, 在宅痴呆高齢者と虐待: 介護を拒否する夫への心理教育, 家族療法研究	2002	心理教育によってネグレクトを減らすことが可能か, 介護者の心理はどのように変化するかについて考察すること	認知症の妻を単身で介護する夫の事例
木村健一, 高齢者虐待の1症例, 埼玉県医学会雑誌	2002	病院で経験した高齢者虐待事例を考察すること	69歳の女性が長女に虐待された事例
國吉緑, 沖縄県における在宅要介護高齢者虐待に関する研究: 看護職者に対するアンケート調査より, 琉球医学会誌	2003	沖縄県における在宅要介護高齢者の実態を明らかにし, 高齢者虐待の予防や支援の方向性を検討すること	看護職者
津村智恵子, 高齢者の虐待要因の解明に関する研究, 社会医学研究	2003	疫学研究の手法を用いて, 高齢者虐待の発生要因について検討すること	要支援, 要介護高齢者で, 虐待が明確になった事例と高齢者虐待がない事例
中村京子, 老人虐待・事故を防ぐ地域看護の課題: 痴呆高齢者の傷害・殺人事件判例からの示唆, 日本看護学会論文集: 地域看護	2004	高齢者虐待や事故を防ぐための地域看護の課題を検討すること	傷害・殺人事例
伊藤敬雄, 介護ストレス以外の高齢者虐待の原因: ADLが自立していた4症例報告からの検討, 臨床精神医学	2004	経験した高齢者虐待4事例について考察すること	身体的虐待2例と介護放棄2例
高崎絹子, 在宅高齢者に対する虐待事例の「深刻度」とその関連要因: 全国の実態調査を基にして, 高齢者虐待防止研究	2005	生命にかかわる「深刻度」の高い高齢者虐待の虐待状況, 関連要因, 関係するスタッフや機関などによる援助・介入の状況を分析し, 今後の事例援助やシステムづくりに資すること	介護保健事業所, 医療機関, 保健所・保健センター
山口光治, 高齢者放任に対する介護者の意味づけ: ソーシャルワーク実践への象徴的相互作用論アプローチ, 高齢者虐待防止研究	2005	専門職者の目をおとした家族もしくは介護者の高齢者放任に対する意味づけを明らかにすること	高齢者の地域生活支援に取り組む5年以上の経験がある専門職者
金子善彦, 高齢者虐待と家族: 高齢者本人へのアンケート調査と家族関係危険因子評価表について, 老年精神医学雑誌	2005	家族そのものに焦点をあてた①被虐待が疑われる高齢者, ②虐待が疑われる家族, ③両者の関係, その3つに含まれる項目について説明すること	高齢者本人および施設 (特別養護老人ホーム, 養護老人ホーム, 軽費老人ホーム, ケアハウス, 地域ケアプラザ) 職員
山田宏治, 地域ケア会議における高齢者虐待防止の支援: 弁護士および警察官との連携, プライマリ・ケア	2005	経済的虐待に対して弁護士と連携すること, 身体的虐待と介護チームの脅しに対して警察官と連携することについて考察すること	経済的虐待事例と身体的虐待事例
赤司秀明, 高齢者虐待における虐待者と被虐待者との分離の問題に関する研究: 望ましい高齢者虐待防止システムの構築のために, 高齢者虐待防止研究	2005	虐待者と被虐待者の分離問題に対する考え方を整理することにより, 望ましい高齢者虐待防止システムの構築に資する考察をすること	重度と考えられる高齢者虐待
加藤悦子, 介護保険サービスを利用していない高齢者における虐待の実態, 高齢者虐待防止研究	2006	介護保険サービスを利用していない高齢者における虐待の実態を明らかにし, 早期発見に向けた方策を検討すること	要介護認定を受けていない65歳以上の在宅高齢者
須藤昌寛, 高齢者に対して不適切な介護をおこなっていた介護者への理解に関する一考察, 社会福祉士	2006	介護者への理解について考察すること	昭和32年生まれ的女性
安梅勲江, 家族の介護意識と要介護者の自己決定阻害の関係に関する研究: 高齢者虐待の予防に向けて, 厚生指標	2006	高齢者虐待の予防のため, 要介護者の自己決定阻害に焦点をあて, 住民の介護意識, 要介護者の自己決定阻害に関する意識および両者の関連を明らかにすること	20歳以上の人
大和田猛, 高齢者の生活支援をめぐるケアマネジメントの援助方法をめぐる課題: 高齢者虐待問題を中心に, 青森県立保健大学雑誌	2006	青森県内の高齢者虐待の実態を把握し, 虐待という事実に対して, どのような支援や予防・発見システムが有効に機能しうるか, さらに, 虐待防止ネットワークシステムを地域で構築していくための課題は何かを探ること	居宅介護支援事業所, ヘルパーステーション, 訪問看護ステーションの職員

表2. 続き

筆頭著者名, 表題, 学術雑誌名	発行年	目的	対象者
中村京子, A地域高齢者虐待事例の家族類型と要因分析からの一考察:介護支援専門員・市町村保健師への実態調査から, 日本看護学会論文集:地域看護	2006	把握した虐待事例の家族類型や要因を分析し, 地域看護の具体的な課題を検討すること	介護支援専門員と保健師
難波貴代, 共依存関係にもとづく高齢者虐待への看護介入, 日本保健福祉学会誌	2006	不適切な介護を行う介護者の行動に着目し, 介護者の特徴, 被介護高齢者との共依存関係にある介護者への看護介入について検討すること	訪問看護師
大和田猛, 在宅介護支援センターにおけるケアマネジメント実践の課題:高齢者虐待問題とケアマネジメント機能を中心に, 青森県立保健大学雑誌	2006	在宅介護支援センターにおけるソーシャルワーカーが行うケアマネジメント実践を考察の中心に据えながら, ケアマネジメント機能と関連させつつ, 臨床的・政策的課題を追究すること	全国の高齢者虐待実態および青森県の高齢者虐待実態
上田照子, 在宅要介護高齢者を介護する息子による虐待に関する研究, 老年社会科学	2007	息子による介護の実態と虐待の発生要因を明らかにすること	介護支援専門員
鶴沼恵晴, 虐待者である「息子」の特徴と高齢者虐待防止への視点:研修参加訪問介護員へのアンケート調査からの知見, 社会福祉学	2007	息子による虐待の具体的な実態把握および今後の支援策を提示すること	訪問介護員
一瀬貴子, 虐待が発生している家族集団の家族機能的適応能力と虐待発生頻度との関連, 関西福祉大学社会福祉学部研究紀要	2007	家族システム内の力動という視点から虐待発生要因を明らかにすること, 高齢者虐待発生事例に対するファミリーソーシャルワーク実践のためのアセスメント視点やアプローチ方法について考察すること	社会福祉・看護専門職者および民生委員・地域推進委員
一瀬貴子, 在宅介護場面における高齢者虐待に関する研究:虐待の判断に対する援助職の意識および初期対応の実態, 関西福祉大学研究紀要	2007	高齢者虐待判断に対する意識を援助職の職種別に比較すること, 虐待種類別に虐待の発見経緯や家族特性を把握することにより, 早期発見のためのアセスメント指標について考察すること	社会福祉・看護専門職者および民生委員・地域推進委員
藤江慎二, 老老介護における高齢者虐待の予防的相談面接:家族介護者に対する相談面接に焦点を当てての一考察, 高齢者虐待防止研究	2008	事例をもとに高齢者虐待問題における家族介護者への予防的相談面接の技術について考察し, その効果を明らかにすること	在宅における老老介護事例
野村祥平, ひとつの地域における高齢者のセルフ・ネグレクトの実態, 高齢者虐待防止研究	2008	セルフ・ネグレクトの要因と課題を明確化すること	地域包括支援センター
宇田川充隆, 私のカルテから:認知機能低下を伴った高齢者身体的虐待の2症例, 精神医学	2008	事例を考察すること	身体的虐待事例
細川雅人, 高齢者虐待と広汎性発達障害, 訪問看護と介護	2008	広汎性発達障害特性が虐待に結びつく理由, 社会的背景について考えること	広汎性発達障害に関する事例
末原知子, これ以上, もう私の心をつぶさないで:虐待者が虐待に至る内的メカニズムの分析, ソーシャルワーク研究	2008	ソーシャルワークにおける高齢者虐待に対する支援のあり方を検討すること	同居する実の娘による高齢者虐待事例
古川潤子, 高齢者虐待に関する関心:日・北欧比較, 社会医学研究	2009	高齢者虐待防止法が施行された日本在住者と以前より制度が施行されている北欧在住者の意識の差を探究すること	女性高齢者と男性高齢者
原口祥典, 高齢者虐待防止法の適用における処遇困難ケース:虐待により視力障害を合併した統合失調症の1例, 精神科	2009	虐待家族への介入や身体合併症など, ささまざまな問題を含んだ統合失調症の1例を考察すること	虐待により視力障害を合併した統合失調症の1例
福泉麻衣子, 施設に保護された被虐待高齢者への支援に関する研究, 高齢者虐待防止研究	2009	施設における被虐待高齢者の支援のあり方について検討すること	介護老人福祉施設, 養護老人ホーム, 救護施設の職員
上田照子, 要介護高齢者の息子による虐待の要因と多発の背景, 厚生学の指標	2009	息子による高齢者虐待の実態と虐待の背景要因を明らかにし, 近年の多発の背景について検討すること	介護支援専門員とケアマネジャーおよび訪問介護員
長谷川明美, 高齢者虐待事例への支援における分離の検討:A市高齢者虐待防止ネットワークの実践から, 高齢者虐待防止研究	2009	今後の高齢者虐待事例の支援に資すること	虐待があると判断した事例への支援記録
前馬理恵, 家庭内高齢者虐待の実態と発生要因, 和歌山県立医科大学保健看護学部紀要	2009	高齢者虐待の発生要因を明らかにし, 支援のあり方を検討する資料を得ること	高齢者に接する専門職者
新鞍真理子, 家族介護者の要介護高齢者に対する身体的および心理的虐待の切迫感に関連する要因, 老年社会科学	2009	家族介護者が抱く要介護者に対する身体的および心理的虐待の切迫感に関連する要因を明らかにすること	家族介護者
一瀬貴子, 家庭内高齢者虐待事例に対する社会福祉士のソーシャルワーク実践スキルの構造:家族システム内機能・構造変容を目指したソーシャルワーク実践スキルを中心に, 関西福祉大学社会福祉学部研究紀要	2009	家庭内高齢者虐待発生事例の家族システム内機能, 構造の変容を目指す社会福祉士のソーシャルワーク実践スキルの活用頻度や構造を明らかにすること	社会福祉士
大島康雄, 息子による高齢者家庭内虐待に関する一考察, 北星学園大学大学院論集	2010	息子による虐待の特徴を踏まえつつ, 具体的な支援方法を提起すること	親子関係から介入困難事例, 息子から介入拒否があった事例と分離に至った事例

表2. 続き

筆頭著者名, 表題, 学術雑誌名	発行年	目的	対象者
柘刈美智子, 重度認知症の母親を介護する家族に対するケアマネジャーの関わり: 息子介護と高齢者虐待, 悠久崇徳学園長岡看護福祉専門学校紀要	2010	高齢者虐待の改善の要因を明らかにすること	息子介護による重度認知症の高齢者虐待
塚田千春, 高齢者虐待の事例を通して学んだ急患室看護師の役割, 群馬県救急医療懇談会誌	2010	高齢者虐待1例を考察すること	次男による高齢者虐待
越谷美貴恵, 認知症高齢者の攻撃的行動に対する家族介護者の体験および対処: ある認知症ケア専門士の在宅介護の事例分析を通して, 高齢者虐待防止研究	2010	今後の家族介護者を支える支援のあり方について検討し, 高齢者虐待防止につながる取り組みを進展させる基礎的資料とすること	介護福祉士
Mariko Niikura, Factors related to contemplation of abuse among family caregivers (家族介護者間での虐待の意図に関連する因子), 日本保健福祉学会誌	2011	家族介護者間での虐待の意図に関連する因子を明らかにすること	主介護者
岸恵美子, 専門職者がかかわる高齢者のセルフ・ネグレクト事例の実態と対応の課題: 地域包括支援センターを対象とした全国調査の結果より, 高齢者虐待防止研究	2011	専門職者がかかわっているセルフ・ネグレクト事例の実態を明らかにし, 今後の課題を検討すること	地域包括支援センター
岸恵美子, セルフ・ネグレクト状態にある独居高齢者の特徴: 地域包括支援センターを対象とした全国調査の結果より, 帝京大学医療技術学部看護学科紀要	2011	セルフ・ネグレクト状態にある独居高齢者の特徴を明らかにすること	全国地域包括支援センター
野村祥平, セルフ・ネグレクトの状態にある高齢者への予防・支援の法制化に関する考察: 高齢者権利擁護法の成立に向けた課題, 高齢者虐待防止研究	2011	セルフ・ネグレクト状態にある高齢者の実態を明らかにするとともに, 支援・予防策の法制化に向けた提言を行うこと	全国地域包括支援センター
宿里泉, 嫁姑間の高齢者虐待発生プロセスに関する研究, 日本看護学会論文集: 地域看護	2012	嫁と姑の間に起こった虐待に着目し, 事例に共通する虐待発生までのプロセスを明らかにすること	嫁
桐野匡史, 在宅家族介護者の介護関連デイリー・ハッスルと介護放任傾向との関係, 日本保健科学学会誌	2012	介護関連デイリー・ハッスルと介護放任傾向の関連性について検討すること	家族介護者
梅崎薫, 養護者から的高齢者虐待と社会環境に関する一考察 早期把握, 未然に防ぐ家族支援の体制にむけて, 医療ソーシャルワーク	2012	家族などの養護者による高齢者虐待の発見, 相談・通報, 調査, 対応の実態を分析し, 発見率の国際比較, 虐待と社会環境に関する考察も加え, 早期把握, 未然に防ぐ家族支援体制に向け, 検討すべき研究課題, 仮説を設定して考察すること	公表統計の相談・通報受理件数, 調査対象件数および調査実施件数, 被虐待者数とその年齢, 対応した虐待事例数
大光房枝, 在宅の被虐待高齢者と養護者の分離の判断根拠と分離を行う際の支援内容: 行政保健師の役割を中心に, 高齢者虐待防止研究	2012	行政保健師が在宅の被虐待者の安全確保のために行う被虐待者と養護者の分離の判断根拠, 分離を行う際の支援内容を明らかにすること	保健師
大光房枝, 在宅の高齢者虐待事例に対する養護者と被虐待者の分離に関する実態と課題, 高齢者虐待防止研究	2012	養護者と被虐待者の分離に関する実態と課題を明らかにすること	高齢者虐待防止担当者
橋本和明, 包括的虐待という視点からみた虐待の深刻化する要因分析: 事例のメタ分析を用いた虐待の共通カテゴリーの抽出, 心理臨床学研究	2012	虐待をメタという視点から包括的に捉え, その包括的虐待が深刻化する要因にはどのようなものがあるのかを抽出し, その共通要因について分析すること	児童虐待, DV, 高齢者虐待
檜原登子, 高齢者虐待防止法前後の認知症高齢者虐待に関しての検討: 1997年~2011年までの報告書の分析及び文献検討から, 秋田看護福祉大学地域総合研究所研究所報	2013	虐待の現状, 虐待の要因および予防策を明らかにすること	報告書と文献
松山真知子, 精神障害者を持つ親の精神的健康およびこれに関わる要因: 精神障害者による親への虐待に注目して, アディクションと家族	2013	精神障害者の親が抱える困難, とくに子から親への虐待に関する実態, それらが親の精神的健康におよぼす影響について明らかにすること	精神障害者家族会会員および家族教室参加者
勝亦麻子, 地域包括支援センターにおける高齢期のドメスティック・バイオレンス (DV) の実態調査: DVケースの特徴と社会福祉士における虐待の発生原因の捉え方, 高齢者虐待防止研究	2013	配偶者間の虐待におけるDVの発生要因をどのように捉えているかを明らかにすること	社会福祉士
吉田光枝, レビー小体型・女性・中等度の虐待: 長年の家族不和による10年にわたる「ネグレクト」の事例: 訪問介護職者の立場から, 訪問看護と介護	2013	事例を考察すること	レビー小体型認知症の女性に対する中等度の虐待事例
日野和子, 脳血管性・男性・軽度の虐待: BPSDが家族関係を悪化させ「ネグレクト」「心理的虐待」に至った事例: 訪問看護師の立場から, 訪問看護と介護	2013	事例を考察すること	脳血管性認知症の男性に対する軽度の虐待事例

した研究が多かった (59本中31本).

3. 高齢者虐待の危険/原因因子

家族同心球環境理論 (CSFET) の5つのシステムの視点に沿って, 高齢者虐待の危険/原因因子を

表3に示した. 以下では, 各システムの中に含まれるカテゴリ名を【 】内に示した.

1) 家族内部環境システム

家族内部環境システムでは, 介護者側の危険/原

因因子としては【介護者の介護ストレス・負担の増加】が最も多く、記録単位数は9であり、次に【介護者の経済的困窮】が多く、記録単位数は6であった。高齢者側の危険／原因因子としては【高齢者の心身の疾病・障害】【高齢者の判断力や自立度の低下】【高齢者の人格・性格問題】が多く、記録単位数はそれぞれ10, 6, 6であった。また、介護者と高齢者どちらかの危険／原因因子ではなく、介護者と高齢者両者

の関係に関する危険／原因因子としては【高齢者と介護者の人間関係問題】のみが抽出され、記録単位数は11であった。家族全体の危険／原因因子としては、【家族全体の関係問題】【家族／家族員の虐待歴】が多く、記録単位数はそれぞれ6と4であった。

表3. 家族同心球環境理論にもとづき分類した高齢者虐待の危険／原因因子

システム	カテゴリ	記録単位数
家族内部環境システム	[介護者を対象]	
	介護者の介護ストレス・負担の増加	9
	介護者の経済的困窮	6
	介護者の心身の疲労・苦痛	5
	介護者の心身の疾病・障害	5
	介護者の人格・性格問題	5
	介護者の介護知識・技術の不足	4
	介護者のアルコールやギャンブル依存	3
	介護者の若年齢	3
	介護者の高齢者への依存	3
	介護者の認知の歪み	2
	社会資源利用への抵抗感	2
	[高齢者を対象]	
	高齢者の心身の疾病・障害	10
	高齢者の判断力や自立度の低下	6
	高齢者の人格・性格問題	6
	高齢者の要介護期間および要介護状態	3
	高齢者の理解者の死去・不在	2
	高齢者の経済的問題	1
[介護者と高齢者を対象]		
介護者と高齢者の人間関係問題	11	
[家族全体を対象]		
家族全体の人間関係問題	6	
家族／家族員の虐待歴	4	
家族の構成	3	
家族機能の低下	3	
家族負担の増大	2	
家族の経済力の低下	2	
親を扶養する考え方の変化	2	
家族イベントの発生	1	
家族の心の健康問題	1	
マイクロシステム	希薄な近所づきあい	2
	協力者不足	2
	劣悪な居住環境	1
マクロシステム	関係機関の不適切ななかかわり	3
	社会的孤立	1
	ゆとりのない社会生活	1
	サービス不足や不備	1
スーブラシステム	高齢者へのエイジズム	1

2) ミクロシステム

マイクロシステムでは、【希薄な近所づきあい】【協力者不足】【劣悪な居住環境】の3カテゴリが抽出され、それぞれの記録単位数は2, 2, 1であった。

3) マクロシステム

マクロシステムでは、【関係機関の不適切ななかかわり】【社会的孤立】【ゆとりのない社会生活】【サービス不足や不備】の4カテゴリが抽出され、記録単位数はそれぞれ3, 1, 1, 1であった。

4) スーブラシステム

スーブラシステムでは、【高齢者へのエイジズム】のみが抽出された。

4. 高齢者虐待の予防／阻止因子

家族同心球環境理論（CSFET）の5つのシステムの視点に沿って、高齢者虐待の予防／阻止因子を表4にまとめた。カテゴリ名は【 】内に示した。

1) 家族内部環境システム

対象別にみると、介護者には【介護者への身体的、精神的サポート】【介護者の介護負担の軽減】【介護への積極的ななかかわり】、高齢者には【高齢者の施設入所】、そして介護者と高齢者には【介護者と高齢者の間に流れた感情】が抽出され、記録単位数はいずれも1であった。また、家族全体には、【家族全体の心理的なサポート】【介護保険サービスの利用】【家族への介入タイミングの見極め】の3カテゴリが抽出され、記録単位数はそれぞれ2, 1, 1であった。

2) ミクロシステム

マイクロシステムでは、【地域住民へのサポートおよび啓発】のみが抽出され、記録単位数は2であった。

3) マクロシステム

マクロシステムでは、【情報や交流の場の提供】【教育プログラムの提供】【介護保険サービスの導入】の3カテゴリが抽出された。それぞれの記録単位数

表4. 家族同心球環境理論にもとづき分類した高齢者虐待の予防/阻止因子

システム	カテゴリ	記録単位数
家族内部環境システム	[介護者を対象]	
	介護者への身体的, 精神的サポート	1
	介護者の介護負担の軽減	1
	介護への積極的なかわり	1
	[高齢者を対象]	
	高齢者の施設入所	1
	[介護者と高齢者を対象]	
	介護者と高齢者の間に流れる感情	1
	[家族全体を対象]	
	家族全体の心理的なサポート	2
介護保険サービスの利用	1	
家族への介入タイミングの見極め	1	
マイクロシステム	地域住民へのサポートおよび啓発	2
マクロシステム	情報や交流の場の提供	3
	教育プログラムの提供	2
	介護保険サービスの導入	1

は3, 2, 1であった。

5. 高齢者虐待への支援策

家族同心球環境理論 (CSFET) の視点に沿って、5つのシステムの中でそれぞれに含まれるカテゴリ名、記録単位数を表5にまとめた。カテゴリ名は【 】内に示した。

1) 家族内部環境システム

家族内部環境システムにおける高齢者虐待への支援策として、18カテゴリが抽出された。【介護者の心身状態の改善】【家族関係の調整】【家族全体への視点の保持】【介護者への介護知識・技術の提供】【介護者への理解】が多く、記録単位数はそれぞれ7, 7, 5, 4, 4であった。また、高齢者側への支援策に限ってみると、【高齢者の心身状態の把握や改善】が最も多く、記録単位数は3であった。

2) ミクロシステム

ミクロシステムには、【高齢者虐待や介護の啓発】【住民の連携と地域ネットワークの構築】の2つのカテゴリが抽出され、記録単位数はそれぞれ5, 4であった。

3) マクロシステム

マクロシステムでは、16カテゴリが抽出された。【多職種・多機関の連携】【介入や介護支援方法の検討・開発】【専門職・関係者の能力の育成や向上】【社

表5. 家族同心球環境理論にもとづき分類した高齢者虐待への支援策

システム	カテゴリ	記録単位数
家族内部環境システム	[介護者を対象]	
	介護者の心身状態の改善	7
	介護者への介護知識・技術の提供	4
	介護者への理解	4
	介護者の介護社会化	1
	[高齢者を対象]	
	高齢者の心身状態の把握や改善	3
	高齢者の安全の確保	2
	高齢者への理解	2
	高齢者の経済状況の把握	1
[介護者と高齢者を対象]		
介護者と高齢者の関係の改善	3	
介護者と高齢者両者への視点の保持	2	
介護者と高齢者両者の納得したうえでの分離	2	
介護者と高齢者の家計の分離	1	
[家族全体を対象]		
家族関係の調整	7	
家族全体への視点の保持	5	
家族員全員の心身状態の改善	3	
家族全体への理解	2	
高齢者と家族の相互作用の推進	1	
家族全体の世代間交流の促進	1	
マイクロシステム	高齢者虐待や介護の啓発	5
住民の連携と地域ネットワークの構築	4	
マクロシステム	多職種・多機関の連携	15
	介入や介護支援方法の検討・開発	14
	専門職者・関係者の能力の育成や向上	13
	社会資源の確保や協働	10
	高齢者, 介護者および家族全体に対する体制やシステムの整備	8
	介護サービスの整備や充実	8
	虐待予防につながるサービスやシステムの整備や充実	5
	相談機関や体制の整備	5
	高齢者虐待への教育や啓蒙	5
	地域支援体制づくり	5
	介護保険の補完	4
	専門職者と家族との関係づくり	4
	高齢者虐待の総合的支援体制の整備やネットワークづくり	3
	家族会などの設置	2
	セルフ・ネグレクトに対する法的整備	2
	必要な情報の提供	2
スーブラシステム	偏見や固定概念の払拭	2
社会的コンセンサスづくり	1	
クロノシステム	家族の望ましい状態への支援	1

会資源の確保や協働】の記録単位数が多く、それぞれ15, 14, 13, 10であり、いずれも10以上であった。

4) スーブラシステム

スープラシステムには、【偏見や固定概念の払拭】
【社会的コンセンサスづくり】の2つのカテゴリが抽出され、それぞれの記録単位数は2,1であった。

5) クロノシステム

クロノシステムでは、【家族の望ましい状態への支援】のみが抽出された。

V. 考 察

1. 収載誌発行年別の文献数とその調査方法

高齢者虐待に関する文献は、2006年から2009年までの期間が最も多かった。これは、2006年4月に高齢者虐待防止法が施行されたことで、高齢者虐待が社会的に注目を集めたこと、高齢者の福祉に業務上または職務上関係がある機関などに対する責務を規定したこと、高齢者虐待に対する相談窓口が明確化されたこと、高齢者虐待の相談がしやすくなったことに関連していると考えられる。

調査方法では、質問紙調査が最も多かった。この理由は、質問紙調査では、得られた数多くの情報から高齢者虐待の実態を短時間で、広範囲に把握することができること、統計手法を用いて高齢者虐待の影響因子を解釈できることが関係していると考えられる。

2. 文献内容

ガラードのマトリックス方式は、多くの文献に散在する大量な情報を効率的に考え、使うことができるように文献を整理する方法である。59本の文献の中では、高齢者の実態や高齢者虐待の影響因子を明らかにすることを目的とした文献が多いことが明らかになった。高齢者虐待研究が始まった初期においては、その発生原因に関心が集まったのであろう。質問紙調査と面接調査の対象者には、高齢者虐待や高齢者福祉にかかわる専門職者や専門機関の職員が多く、当事者である高齢者本人やその介護者、家族を対象とした研究は少なかった。この理由は、前馬ら（前馬，山田，水主他，2009）が指摘しているように、ケアマネジャーや訪問看護師は、家庭訪問などをおして被虐待者の身体的・精神的状況、

家庭内の環境を直接的に確認できる立場にあるため、高齢者虐待の事例を把握しやすいからであると考えられる。家庭内虐待は、閉鎖的な空間で起こること、人権意識の低さ、他人に知られることを“家の恥”とする意識の強さ（宿里，堀井，2012）などから、家族内部のことは外部のひとには話さない傾向にある。また、研究者も家族のプライバシーを侵害する可能性があるという倫理的配慮から、家族員と直接接触することに困難感をもつ。直接的に被虐待者本人またはその家族に調査することは難しいため、高齢者と密接な関係をもっている専門職者もしくは専門機関を対象とした研究方法が最も多く用いられていると推測できる。このような状況ではあるが、高齢者虐待の防止や支援策の構築のためには、量的研究であっても質的研究であっても、高齢者虐待を経験した、あるいは経験している高齢者本人やその家族を対象とした研究は必須であり、このような研究を充実させて最善の支援方法を検討する必要がある。

3. 高齢者虐待の危険／原因因子および予防／阻止因子

高齢者虐待の危険／原因因子の多くは、家族内部環境システム内の介護者および高齢者に関するものであった。鶴沼ら（鶴沼，関根，2007）は、被虐待高齢者との人間関係が高齢者虐待の基底的・潜在的要因であると指摘し、介護者と高齢者との人間関係の重要性を報告している。本研究において、最も記録単位数の多かった危険／原因因子は、家族内部環境システムにある【介護者と高齢者の人間関係問題】であり、これは鶴沼らの研究結果と一致する。

また、家族全体を対象とする高齢者虐待の危険／原因因子は9カテゴリあるが、そのうちの【家族機能の低下】のサブカテゴリは“家族関係機能に問題があること”（金子，2005），“家族員の立場に対する頑な姿勢と無責任な役割の放棄”（橋本，2012）“家族機能的適応能力の低さ”（一瀬，2007）の3つであった。家族看護における家族機能とは、家族員の役割行動の履行により生じ、家族システムユニット

が家族員、家族、家族外部環境に対して果たしている働きである(法橋, 樋上, 小林他, 2010)。これにしたがうと、養護者による高齢者虐待は、家族員が高齢者を介護するという役割行動が家族の期待どおりに履行されていないことであり、家族機能状態の低下と関連すると考えられる。今後は、家族機能低下と高齢者虐待の影響因子との関連を検討する必要があるだろう。

高齢者虐待の予防/阻止因子は、今回検討した59本の文献の中で言及されている文献が少なく、抽出されたカテゴリ数は少なかった。その中でも、マクロシステムの【情報や交流の場の提供】の記録単位数が最も多かった。したがって、これが高齢者虐待を予防/阻止するために、重要な因子であることが示唆された。

クロノシステムにおける危険/原因因子および予防/阻止因子は、本研究では抽出されなかった。その理由としては、家族同心球環境理論(CSFET)のような視点から先行研究が実施されていなかったことが考えられる。しかし、クロノシステムは家族が未来への希望および家族の変容を表しているので、クロノシステムからのアセスメントや支援も重要である。したがって、今後は、クロノシステムに関する危険/原因因子および予防/阻止因子も探索する必要があるだろう。

本研究により高齢者虐待の危険/原因因子と予防/阻止因子が明らかになったことで、看護職者は危険/原因因子に焦点をあて、これらを軽減、除去することにより、最善の家族支援が実現できるようになるであろう。同時に、高齢者虐待の予防/阻止因子を家族の強みとして促進、提供することでも家族支援が可能になる。

4. 高齢者虐待への支援策

高齢者虐待への支援策は、家族同心球環境理論(CSFET)の5つのシステムすべてにおいて抽出された。家族内部環境システムでは、【介護者の心身状態の改善】と【家族関係の調整】の記録単位数が多く、重要な支援策であることが示唆された。介護

者の心身状態は介護負担、介護ストレスおよび介護者の心身の疲労・苦痛に深い関係があり、家族関係の問題は虐待問題を引き起こす大きな因子(赤司, 2005)であるので、これらへの支援が必要不可欠であると考えられる。

マクロシステムでは、【多職種・多機関の連携】【介入や介護支援方法の検討・開発】【専門職者・関係者の能力の育成や向上】【社会資源の確保や協働】の記録単位数が多く、これらが重要な支援策として示唆された。とくに【多職種・多機関の連携】は、最も記録単位数が多かった。高齢者虐待では、身体的虐待に対する看護職者または介護専門職者の介入、経済的虐待に対する弁護士などのように、異なる虐待の種類に対してそれに対応できる一番ふさわしい専門職者の介入が必要である。しかし、実際に高齢者虐待が発生した場合には、1つの虐待サブタイプのみではなく、複数の虐待サブタイプが同時に発生していることが多い。このような場合では、対応が複雑化することが考えられるため、複数の専門職者間の協働が必要不可欠であろう。したがって、今後、多職種・多機関の連携をさらに深めていくことが求められる。

また、【家族の望ましい状態への支援】というクロノシステムにおける支援策が抽出された。家族同心球環境理論(CSFET)のクロノシステムでは、時間的距離によって、各システムの時間的な経過、とくに成長および発達という脈絡から家族の変容を評価できる(法橋, 本田, 2013)。この点から考えると、クロノシステムへの支援策も不可欠であると考えられる。

5. 本研究の限界と今後の研究課題

本研究は、文献中に記述のある高齢者虐待の影響因子および支援策を抽出したが、それらの内容には、高齢者虐待の影響因子や支援策について簡潔な記述にとどまり、詳細が不明なものも含まれていた。そのため、カテゴリの抽象度が必ずしも揃わなかったことは、本研究の限界である。

59本の文献の中には、家族機能の視点から研究

している文献が少なかった。家族機能の視点から高齢者虐待の影響因子および支援策を研究する必要がある、これは今後の課題である。また、本研究で明らかになった高齢者虐待の危険／原因因子および予防／阻止因子にもとづいて、日本の社会的・文化的背景に合わせた高齢者虐待のアセスメントツールや支援ツールの開発が望まれる。

VI. 結 論

59本の国内文献を検討した結果、高齢者虐待の危険／原因因子としては、介護者と高齢者の人間関係問題、高齢者の心身の疾病・障害、介護者の介護ストレス・負担の増加、高齢者へのエイジズムなどが明らかになった。また、予防／阻止因子としては、情報や交流の場の提供、家族全体の心理的なサポートなどが明らかになった。看護職者は、危険／原因因子を除去したり、予防／阻止因子を提供することで、最善の家族支援が実現できるようになる。

高齢者虐待への支援策としては、多職種・多機関の連携、介入や介護支援方法の検討・開発、家族の望ましい状態への支援などが明らかになり、家族外部環境システムにおける支援策が最も多かった。今後、高齢者虐待の研究は、高齢者虐待を経験した高齢者本人や家族を対象として、家族看護における家族機能の視点から研究する必要がある、とくに家族内部環境システムへの支援策を検討する必要がある。

〔受付 '14.02.05〕
〔採用 '15.11.16〕

文 献

赤司秀明：高齢者虐待における虐待者と被虐待者との分離の問題に関する研究：望ましい高齢者虐待防止システムの構築のために、高齢者虐待防止研究, 1(1)：60-68, 2005

Berelson, B.: Content analysis in communication research, Free Press, Glencoe, IL, 1952

Garrard, J.: Health sciences literature review made easy: The matrix method, Jones & Bartlett Learning, Sudbury, MA, 2011

橋本和明：包括的虐待という視点からみた虐待の深刻化する要因分析：事例のメタ分析を用いた虐待の共通カテゴリの抽出, 心理臨床研究, 30(1)：17-28, 2012

檜原登志子, 黒澤蘭子, 佐藤祥子他：高齢者虐待防止法前後の認知症高齢者虐待に関する検討：1997年～2011年までの報告書の分析及び文献検討から, 秋田看護福祉大学地域総合研究所研究報告, 8：12-25, 2013

法橋尚宏, 樋上絵美, 小林京子他：新しい家族看護学：理論・実践・研究, 法橋尚宏編集, メヂカルフレンド社, 東京, 2010

法橋尚宏, 本田順子：法橋の“家族同心球環境理論”と“家族ケア／ケアリング理論”の世界, 保健の科学, 55(12)：808-813, 2013

一瀬貴子：虐待が発生している家族集団の家族機能的適応能力と虐待発生頻度との関連, 関西福祉大学研究紀要, 10：169-177, 2007

金子善彦：高齢者虐待と家族：高齢者本人へのアンケート調査と家族危険因子評価表について, 老年精神医学雑誌, 16：194-204, 2005

厚生労働省 (2014a)：今後の高齢者人口の見通しについて, http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/dl/link1-1.pdf, (2014年12月9日入手)

厚生労働省 (2014b)：平成24年度高齢者の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律に基づく対応状況等に関する調査結果, <http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-12304500-Roukenkyoku-Ninchishougyaku-taiboushitaisakusuishinshitsu/h24chousakekka.pdf>, (2014年12月9日入手)

前馬理恵, 山田和子, 水主千鶴子他：家庭内高齢者虐待の実態と発生要因, 和歌山県立医科大学保健看護学部紀要, 5：17-24, 2009

津村智恵子, 入江安子, 廣田麻子他：高齢者のセルフ・ネグレクトに関する課題, 大阪市立大学看護師雑誌, 2：1-10, 2006

梅崎薫：養護者からの高齢者虐待と社会環境に関する一考察：早期把握、未然に防ぐ家族支援の体制にむけて, 医療ソーシャルワーク, 60：18-26, 2012

鶴沼憲晴, 関根薫：虐待者である「息子」の特徴と高齢者虐待防止への支援：研修参加訪問介護員へのアンケート調査からの知見, 社会福祉学, 47(4)：111-123, 2007

宿里泉, 堀井とよみ：嫁姑間の高齢者虐待発生プロセスに関する研究, 日本看護学会論文集：地域看護, 42：42-45, 2012

Elder Abuse in Japan: A Literature Review Based on the Concentric Sphere Family Environment Theory

Qinqiuzi Yi¹⁾ Junko Honda¹⁾ Naohiro Hohashi¹⁾

1) Division of Family Health Care Nursing, Kobe University Graduate School of Health Sciences
(Certified Nurse Specialist [CNS] in Family Health Nursing Program)

Key words: Elder abuse, Literature review, Influence factors, Family, Concentric Sphere Family Environment Theory

Background and Purpose: In Japan, the number of complaints, reports, and incidents of elder abuse has been increasing, making support for the family system unit, including both the abuser and abused person, an urgent issue. In this study, the literature concerning elder abuse was reviewed, with the aim of identifying the risk factors/causal factors and the preventive factors/inhibitory factors associated with elder abuse, and clarifying support measures for families with elder abuse.

Methods: Utilizing the Ichushi Web, a Japanese medical literature database, with the key words “elder abuse” and “family,” a search limited to original papers was conducted, from which 59 papers having descriptions concerning risk factors/causal factors; preventive factors/inhibitory factors; and support measures associated with elder abuse, were used in this study. Papers were sorted using Garrard’s matrix method and analyzed by the Berelson’s content analysis.

Findings: The risk factors/causal factors such as “Human relationship problem between caregivers and the elderly,” “Physical and mental illness/disability of the elderly,” “The increase of the care stress/burden of the caregivers” and the preventive factors/inhibitory factors such as “Provision of a place for information exchange” and “Psychological support for the whole family” were extracted. In addition, most of the support measures for elder abuse such as “Cooperate with diverse specialists and multidisciplinary institutions” and so on existed in the family external environment system.

Discussion and Conclusions: By removing the risk factors/causal factors and offering the preventive factors/inhibitory factors, which were demonstrated in this study, nurses can provide the best care for families. To support the family with elder abuse, further research is needed to consider support measures in the family internal environment system.